

学 校 名	山形市立明治小学校	校 長	今田 正行
	山形市大字灰塚454番地 TEL681-8473 FAX684-6879	研究主任	布川 孝子
研 究 主 題	ともに学び、豊かな自己を創る子どもの育成 ＝地域・人・異文化とふれあう活動を通して＝		
主 題 設 定 の 理 由	（１）教育目標の実現を目指して 本校では、教育目標を「明治を愛し、国際的な視野に立ち、21世紀をたくましく生きる子どもを育てる」と設定し、今年度の重点として、「かかわれるわたし」「よいことをするわたし」「からだをきたえるわたし」を掲げている。 「かかわれるわたし」とは、交流できる、コミュニケーションできる、表現できる子ども、自然・社会・人・歴史・文化等とのかかわりを主体的にもてる子どものことである。「よいことをするわたし」とは、思いやりの心を持てる子ども、ボランティアができる子ども、善悪の判断ができる子どものことである。「からだをきたえるわたし」とは、健康作りができる子ども、体力作りができる子どものことである。 学校研究では、特に「かかわれるわたし」に焦点を当て、地域・人・異文化とふれあう活動を中心にして、「ともに学び、豊かな自己を創る子ども」を目指していききたい。 この「地域・人・異文化とふれあう活動」は、これからの国際化時代を生きる子どもの素地を作る活動、すなわち、国際理解教育と考える。本校においては、国際理解教育の視点を「明理解」「人間理解」「異文化理解」そして「コミュニケーション力の育成」とし、国際理解教育に直接的に関わる特定の単元においてのみ実施するのではなく、各教科、道徳、特別活動、総合等の教育活動全体を通じて日常的に実施するものとする。 「ともに学び、豊かな自己を創る」とは、自分の特性を生かしながら広い視野に立って、友、達と、共、に人・環境・文化に、共、感しながら主体的に課題を追求し、自己実現を図っていくことである。 （２）子どもの実態と教師の願いから 昨年度までの実践を通して本校の子ども達を見ると、自分たちの思いや願いをもって、意欲的に活動しようとする姿が多く見られるようになってきた。目的を同じにするもの同士が共に活動することにより、自然に協力し合う様子なども生まれてきている。また、地域の方を中心にした各方面の専門の先生に学ぶことで、子ども達にとってより価値のある学びができた。 反面、交流・発信の場面では、まだまだパターン化・マニュアル化された表現の仕方から抜けきれなかったり、表面的な意見交換にとどまったりすることも少なくなかった。 そこで、言語表現や身体表現等の表現力の向上を図るとともに、自分の考えを発信し、それに対する他からの考えを受信するという話し合いや交流の仕方の能力を高めていきたいと考える。すなわち「ともに学ぶ」姿、「豊かな自己」実現を目指すものである。 （３）教育の今日的課題から 現代は、まさに国際化時代、情報化時代である。テレビやインターネット等を通して世界の様々な情報をリアルタイムで知ることができ、町の中は様々な国の文化やありとあらゆる情報であふれている。 このような時代を生きる子ども達にとって大切なことは、豊かな心を持ち、思考力や判断力を働かせて、確かな自分の考えを持つことができることである。そして、さらに、自分の思いや考えを相手にはっきり伝える表現力を持つこと、相手の考えや必要な情報を適切に取り入れる受信力を身につけることである。 そのために、自分の足下をしっかりと固め、様々な人や文化に積極的に関わり合いながら、ともに学び、互いに理解し合い、共に高まろうとする子どもの育成を図っていききたい。		
研 究 の 仮 説	研究の仮説 ・地域や自国の自然・文化等にふれる場、また、異文化にふれる場を積極的に設定し、他との関わりを大切にした活動のあり方を工夫することにより、他を理解し、良さを取り入れながら、よりよいものを目指そうとする子どもが育つであろう。		

	国際理解教育指導の視点								
研究の視点	めざす子ども 人間理解 かかわれる力 異文化理解 明治理解								
	国際理解教育を教育活動全体において、共通した指導方針で実践するために、かかわれる力をつけるための3つの視点を設定し、これらの視点からの実践の日常化を目指したい。 ◎ かかわれる力 人々とのかかわりだけでなく、自然や文化、歴史等々に自ら積極的に関わり、追求したり、それらから何かを学ぼうとする資質や態度を育成する。 また「コミュニケーション力」は「かかわれる力」の一部と考え、他とのかかわりの中で、相手の考えを理解しようとしたり、自分の考えを表現しようとする能力や態度ととらえる。 ○ 明治理解 自分たちのふるさと明治の自然・文化・歴史・人々について理解しつつ、そのすばらしさを発見し、他に発信しようとする能力や態度の育成する。 ○ 異文化理解 自分と異なる文化に興味を持ってかかわり、その違いや良さを理解しせいかつに生かすことができる資質や態度の育成する。 ○ 人間理解 身の回りの人々と主体的にかかわることにより、自分との違いを認め、相手を尊重するとともに自分の考えを深めることができる能力や態度の育成する。								
めざす子ども像	<table><tr><td>低 学 年</td><td>中 学 年</td><td>高 学 年</td></tr><tr><td>触れる (好奇心を見いだす)</td><td>知る (知識として知る)</td><td>考える (知識と自分の考えをリンクさせる)</td></tr></table> 明治理解、異文化理解、人間理解のそれぞれの視点に置いて、具体的な子どもの姿を描きながら研究を進めていく。			低 学 年	中 学 年	高 学 年	触れる (好奇心を見いだす)	知る (知識として知る)	考える (知識と自分の考えをリンクさせる)
低 学 年	中 学 年	高 学 年							
触れる (好奇心を見いだす)	知る (知識として知る)	考える (知識と自分の考えをリンクさせる)							
研究の内容と方法	(1) ともに学び合う学級作りを行う。 ①子ども同士、子どもと教師の信頼関係を構築。 ②友達との関わり合う中で伸びようとする姿勢の向上 ③自分の思いを表したり、伝えたりできる個の育成。 ④集団生活のルールやスキルの指導 (2) 各教科・領域と国際理解教育との関連を探る。 ①学級カリキュラムの作成 ②地域教材の掘り起こし ③Eタイムの効果的な活用 (3) 国際理解教育の視野に立った授業の実践を行う。 ①一人1授業の授業研究を行い、実践を通して検証していく。 ②事後研で話し合われたことや成果と課題について「研究情報」を発行し、事後の指導に生かしていく。 (4) 実践の記録と資料整備を行う。 ①学級カリキュラム実践の記録 ②地域内外の人材や学習材の情報収集 ③実践のまとめとしての研究集録作成								
研究の計画	4月 研究主題・内容・方法の検討・決定 5月 上半期学級カリキュラム作成 5月13日 学習会(講演:石崎貴志助教授) 6月18日 学習会(講演:後藤淳子先生) 7月 授業研の持ち方について検討・決定 ひしのみ祭について検討 8月 下半期学級カリキュラム作成 9月30日 第1回授業研究会 10月9日 第2回授業研究会	10月16日 第3回授業研究会 10月25日 ひしのみ祭 11月10日 第4回授業研究会 12月 2学期の反省と3学期の方向性について 研究紀要作成について 1月26日 第5回授業研究会 2月 第6回授業研究会 3月 研究のまとめ(成果と課題) 来年度の方向性について検討・決定							